1960年代北京在住日本人の一人として――山本勝司氏に聞く

飯　塚　　靖

目　次

解説
1. 中国への目覚めと憧れの北京
2. 中国外文出版局での日々と北京在住日本人との交流
3. 文化大革命の勃発と北京在住日本人
4. 帰国と出版事業の創業、そして中国への想い

解説：本稿は、1964年より68年の４年間、北京の外文出版局で勤務した山本勝司氏による回想であり、山本氏の生い立ちと青春時代、北京に派遣されるまでの経緯、北京での仕事内容、1960年代中頃の北京在住日本人の群像、文化大革命開始時期の体験、ならびに帰国後の仕事や中国への想いなどについて、聞き取りを行い文章にまとめたものである。具体的には、2020年２月15日、千葉県市川市の山本氏のお宅を飯塚が訪問して、山本氏が事前に作成されたメモをもとにお話しを伺った。さらに、翌16日には同氏より、前日の質疑内容をふまえて追記されたメモをお送りいただいた。聞き取り調査とメモをもとに飯塚が文章にまとめ、さらに追加事項の質問をメールや電話で行ない、内容をより充実させ、文章として完成させたものである。

戦後の日中関係史を国家間の枠を超えた人々の交流の中から描き出すことを企図して、オーラル・ヒストリーの取り組みがなされ、成果が上げられている（天児慧ほか編、2020年）。本回想も、1972年の日中国交正常化以前の北京在住日本人の在り方について詳しく語られ、日中交流史を人的側面から考察するための貴重な証言となっている。本回想で述べられるように、文化大革命勃発直前の1960年代中頃の北京には、多くの日本人が在住あるいは長期滞在して、中国政府の各種文化事業や教育活動に協力し、日中交流の基礎を支えていたのである。山本氏もそうした一人として、中国外文出版局に勤務し翻訳業務を担い、北京友誼賓館で暮らし、日本人の人々との交流を重ねた。そして彼ら北京在住の日本人は、文化大革命の嵐の中で分裂し、毛沢東および文化大革命の評価をめぐって激しく抗争するに至った。本稿により、そうした文革渦中での日本人の分裂と抗争の一端を知ることができる。本回想によれば、1960年代半ばの北京在住の日本人は、大きくは下記のような二つのグループに分けられた。

第一のグループは、戦前から「満洲」（以下かっこ省略）などの中国大陸で暮らし、戦後中国共産党（以下、中共と略記）による「留用」（日本人を帰国させずに使役したことに対する中国側の呼称）を経て、1953年から58年にかけて実施された集団引揚でも帰国せず、北京の大学や諸機関で働いた人々およびその家族である。彼らの仕事は多くが日本語関連のものであり、日本語雑誌の編集・翻訳、日本語アナウンサー、日本語学校教師などとして活躍し、中国側からは「専家」（専門家）として厚遇されていた。こうした人々の伝記・回想としては、横川次郎の中国語での回想録（横川次郎著・陸汝富訳、1991年）、川越敏孝（はるたか）の回想録（川越敏孝、2015年）、国谷哲資の回想記（国谷哲資、2019年）がある。また、『新中国に貢献した日本人たち』、『続新中国に貢献した日本人たち』の二冊の著書の中でその履歴が紹介され、中国への貢献が顕彰されている。しかし、他方では自伝や回想も執筆されず、中国側による顕彰からも漏れ、戦前・戦後の中国での足跡が不明の人物も多い。

第二のグループは、中華人民共和国建国後に中国に渡った人々である。アナウンサーや雑誌の編集・翻訳者、日本語教師などとして、中国側の要請に応じて渡中し、「専家」待遇で働いていた。また、そうした日本人グループの周囲には、新中国の建設に協力すべく帰国した在日華僑の存在もあった。彼ら在日華僑も得意の日本語能力を生かして、日本人「専家」と共に業務の一翼を担った。こうした中、

1964 年には、日中の共産党の蜜月関係を基にして、多くの日本共産党員が北京に派遣され、山本氏もその一人であった。こうした 1950 ～ 60 年代に中国に渡り活動した人々の一部については、中国側によりその紹介文が書かれウエブサイト上でも公開されているが、履歴が不明の人物も多く、その足跡の解明は戦後日中関係史研究の重要な課題の一つであると言える。

本稿においては、戦後日中交流の歴史にその名を刻むために、これら北京在住日本人を実名で記載し、その経歴を可能な限り調べて注記した。その際には、川越敏孝回想録を重要な参考資料とし、また国谷哲資氏や林華氏（元北京放送局日本語アナウンサー）にもいろいろとご教示をいただいた。国谷哲資氏は、13 歳で敗戦を迎え、母子で満洲に残留し、鶴崗炭鉱などでの留用を経て、1953 年より日本共産党の非公然指導部である北京機関に勤務し、その後中国人民大学で学び、文革勃発時には砂間一良（いちろう）（日本共産党北京代表）の秘書であった。1950 ～ 60 年代には北京在住日本人と交流し、本回想に登場する人々の多くと交流があった。林華氏は 1927 年生まれであり、旧姓・常澤紀美、中国名は林紀美であり、鶴崗炭鉱の東北建設突撃隊幹部として活躍し、53 年より北京放送局アナウンサー（林華はアナウンサー名）を勤め、現在も北京でご健在である（林華、2019 年）。しかし、1960 年代半ばからすでに半世紀以上の歳月が過ぎ、本回想の登場人物のすべてについて両名からも詳しい証言を得ることはできなかった。今後これらの人々に関する新しい資料や証言が発見され、こうした人々の中国での軌跡がより明らかになることを切望している。

なお、山本氏が北京に赴いた 1964 年には、新設された大連日語専科学校に多くの日本人教師が日本共産党により派遣されていた。それは山本経天（経志江）の研究で明らかにされており（山本経天、2013 年）、大連の日本人教師の責任者であった土井大助の回想もある。土井によれば、大連の日本人教師の間では文化大革命を支持する動きはなく、1966 年末までには全員が帰国したとされる（土井大助、2008 年）。また、電気工学専門の技術者である伏見和郎（67 年より東京大学原子核研究所教授）は、1965 年 8 月より 66 年 11 月まで北京大学に招聘され、北京在住日本人の多くが暮らしていた友誼賓館で生活した。伏見は文革には反対の立場をとり、その著書では文革を支持して運動を展開する友誼賓館在住日本人が批判的に描かれている（伏見和郎、1980 年）。本書も同時期を北京で過ごした日本人の一証言として貴重な内容となっている。

＜参考文献＞

- 伏見和郎『科学技術者のみた文革前後の北京大学』（日中出版、1980 年）
- 横川次郎著・陸汝富訳『我走過的崎嶇小路―横川次郎回憶録』（新世界出版社、1991 年）
- 中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、2003 年）
- 中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『続新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、2005 年）
- 土井大助『末期戦中派の風来記』（本の泉社、2008 年）
- 山本経天（経志江）「第 6 章新中国に支援した日本共産党員―大連日語専科学校の日本人教師団」（『中日国交断絶期の日本語習得者に関する研究』科学研究費補助金若手研究 (B) 研究成果報告書、2013 年 3 月）
- 川越敏孝『回想―戦中・戦後の日中を生きて』（岩波ブックセンター、2015 年）
- 国谷哲資「北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史」（『アジア社会文化研究』第 20 号、2019 年 3 月）
- 飯塚靖「回想記解題　国谷哲資「北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史」」（『アジア社会文化研究』第 20 号、2019 年 3 月）
- 林華「回想『ツルオカ』」（『ツルオカ』復刻版、三人社、2019 年）
- 天児慧・高原明生・菱田雅晴『証言　戦後日中関係史』（岩波書店、2020 年）

1. 中国への目覚めと憧れの北京

＜おいたち＞

私は 1936 年 11 月に大阪に生まれ、本年（2020 年 2 月現在）83 歳となった。1943 年、私が 7 歳の時、父は中国湖南省で戦死した。45 年、小学 3 年の時に、米軍による爆撃で家を焼失、母と妹と私の 3 人家族は親類を頼って奈良県に疎開した。さらに 46 年には、京都の叔父を頼って京都へ移住した。京都では、平安中学、西京高校で学び、56 年に大阪外国語大学中国語科に入学した。大阪外大の中国語科を選択したのは、特別な理由はなかった。京大の入試に 2 回失敗して、滑り止めでひっかかっただけである。

中国に対しては子供のころから「ちゃんころ」意

識で教育されていて、強い蔑視の気持ちをもっていた。落ちこぼれで中国語科に入ったことで、自虐し厳しい鬱状態に陥った。学校の授業には気持ちが乗らず、サボり続けた。1年の学年末に担当教官から「今度の試験で成績がよくなければ、落第させる」と通告を受け、やむなく自習で授業内容は修得して、なんとか2年への進学を果たした。

当時、大阪外大の中国語科では、教科書が『毛沢東選集』であり、「実践論」、「矛盾論」、「文芸講話」などの毛沢東の文章を読み、巴金・茅盾・魯迅などの小説や雑誌『人民文学』に掲載された諸作品もテキストとして読んだ。日々、中国革命の歴史を学んだと言える。

観念論哲学に耽溺していた私には、毛沢東の革命的唯物史観は圧倒的な圧力であり、恐怖そのものであった。日々「実践論」、「矛盾論」と対決するうちに、やがて自己変革の必要性を強く感じ取り始めた。換骨奪胎。授業にも積極的に取り組み始めた。

社会では勤評闘争や安保闘争のデモが激しく繰り広げられ、それに呼応して学内での政治活動も活発であった。そうした運動は、ロシア語科と中国語科の学生がリードし、中国語科の50人クラスに共産党員が3人いた。私は完全なノンポリであったが、彼らの影響を受けた。大阪外大では、最初の2年間は語学を学び、3年次に文学専攻と経済専攻に分かれたが、私は文学に進んだ。

大学4年の秋、付き合っていた女性との間が、家柄差別によって潰されてしまった。理不尽な社会悪への憤りとそれに挫折した自分への嫌悪感から、革命に身を投じる決意をした。1960年に卒業したあと小さな貿易商社に入社したが、1年で辞めて、共産党の細胞があると思われた極東書店に転職した。同書店は、中国および外国書籍の輸入販売と社会主義関係の日本語書籍の販売を専門としており、本社は東京にあった。私は京都支社に勤務して、京都大学、立命館大学などの学者・研究者に、中国、ロシア、東西ドイツ、イギリス、アメリカの政治・経済・歴史関係の研究書を販売して回る一方、余暇時間を利用して雑誌『人民中国』の普及拡大活動を通じて中国革命の宣伝や日中友好運動に積極的に取り組んだ。私個人としては、京都市下京区西部の工場街を中心に日中友好運動を展開した。工場労働者のなかに浸透して、労働組合運動も繰り広げながら、中核である共産党組織も拡大して、全国的にも割合に目立った活動を行った。

＜北京へ＞

当時の私にとって、いうまでもなく訪中は最大の夢であった。学生時代に中国語を学び、学生運動や日中友好運動に身を投じ、共産党員になっていた私にとって、中国は憧れの革命の聖地であった。ただ、東西冷戦下の情勢で、訪中の機会を得ることは僥倖に等しいことだった。こうした私の夢が、降ってわいたように1964年に国際書店への交換社員という名目で実現した。国際書店は、極東書店の業務上の交渉相手であり、中国が扱う全書籍の輸出入業務を管掌していた。このように私の派遣は、名目は交換社員ということであったが、実際は日本共産党からの派遣であった。中国へ向かう直前、ちょうど来日していた中国の幹部が「これから大規模な整風運動が始まります。良い機会なので勉強してくるとよいです」との話しがあり、期待で胸が膨らんだ。あとから考えると、文革の2年前にすでに文革を予知する人物がいたことは驚きであった。中国への出発直前に代々木の日本共産党本部を訪問して挨拶をしたが、その際に応対した幹部は安斎庫治であった。この北京派遣は2年間の約束であったが、文革が始まったので、結局4年間滞在することになった。

1964年6月、27歳であった私は、香港を経由して深圳の橋を渡って赤旗のなびく中国側へ渡った。そして空路で憧れの北京に到着した。到着した数日は市内の観光だった。故宮から天安門、人民大会堂、歴史博物館と巨大な建築物に驚いた。なによりも人民大会堂などの巨大建築物、天安門前広場の広大さには目を奪われた。これらの巨大建築物が大群衆による人海戦術で短期間に完成されたこと、北京のほとんどの民衆や幹部が労働参加したことを、誇らしげに話してくれる案内者の話を感心して聞いた。一方で路上ではロバが荷物を運んでいる情景を目にして、すでに日本では遙か昔に見た風景であり、ずいぶん時代遅れだなと驚いた。そして公衆便所の汚さは度を超すものであり、いまだに思い出すことがある。

同じ時期に北京に到着したのが、吉田浩一、川邑重光の2名であり、ともに20代の若者であった。高比良光司もしばらく遅れて北京に入った。後に知

ることになるが、菅沼不二男・久美夫妻[1]らが帰国したのは61年のことであり、63年には池田亮一[2]さんが亡くなっており、私たちはその空席を埋める後釜だったようだ。

2. 中国外文出版局での日々と北京在住日本人との交流

＜中国外文出版局＞

私たち3名が配属されたのは中国外文出版局（以下、外文局と略称）[3]であり、周恩来総理や陳毅外相の指導の下に1949年10月に創設され、図書・雑誌出版を通じての対外広報活動を担っていた。外文局は阜城門外百万荘に所在しており、広い敷地内に『人民中国』社、『中国画報』社、『北京週報』[4]社及び図書社の4社が配置されていた。それぞれの日本語版編集スタッフとして、複数の日本人が配属されていた。『人民中国』社には、少し時間をおいて到着した高比良光司、その他校正担当として高野梅子[5]、池田寿美（池田亮一夫人）、中国人と結婚していた石川英子がいた。石川英子さんは、日本で中国人趙材源（あるいは趙在源）氏と結婚し、戦後にご主人と共に中国へ帰国した。趙さんは北京の外文局図書社に所属しており、私の同僚であった。2人はその後、1980年代に子供たちと共に日本に移住した。『北京週報』社には、ベテランの川越敏孝、土肥駒次郎・種子夫妻[6]、白鳥冨美子夫妻[7]らが勤務し、川邑重光[8]がここに配属された。この川越さんは、神戸生まれで三高、京大を経て大蔵省主計局に所属したエリート官僚であったが、満洲へ移動させられ、終戦後は中国に残り、『北京週報』社で終身勤務された。『中国画報』社には、横川次郎・辰子夫妻[9]がいた。そして、図書社には、私と吉田浩一が配属され、校正として河野八重子（川越敏孝夫人）が勤務していた。

写真1　天安門広場での式典にて①
左端が高比良光司、右端は土肥駒次郎、中央前列が白鳥さん

＜北京での仕事と生活＞

私たち外文局勤務日本人の宿舎は北京友誼賓館であり、専用の送迎バスで20分ほどかけて通勤した。友誼賓館は、元ソ連の専門家が居住していた高級ホテルであり、ソ連専門家が引き揚げた後に我々が暮らした。日本人以外にも、アメリカ人、イギリス人、フランス人、中近東から亡命してきた将軍などが暮らしており、広大な敷地内に多くの建物が配置されていた。運動場、プール、劇場、売店、医療部門なども完備し、非常に充実した施設であった。私の部屋は1DKであり、バス・トイレも付いた立派なものであった。食事は食堂で食べ、中国料理と洋食があり、時々日本食も出された。立派な映画館が構内にあって毎週映画を楽しめた。時には北京の劇場で京劇や現代劇を観るチャンスもあった。私たち新人3名の給料は月420元であり、当時周恩来が480元、毛沢東が1200元と言われており、新参者の私たちがなぜそんなに高い給料をもらえるのかわからなかった。ちなみに、私の日本での給料は、初任給が1万1000円であった[10]。買い物はホテル内ではもちろん、外部でも自由にできた。しかし、可能な限り質素な生活を心がけたので、給料は十分に余り、帰国時には残額を全部中国側に寄付した。寄付については誰とも相談をせず、自発的に行ったものである。

図書社での私と吉田浩一の仕事は「改稿」というものであった。日本語のできる選りすぐりの中国人スタッフが全国から集められ、彼らが翻訳した下訳を正確な日本語にリライトすることであった。最初に与えられた大きな仕事が『九評』[11]の改稿であった。『九評』はベテランの川越さんたちがすでに完成させて、『北京週報』に掲載されたものだが、

写真2　山本勝司
（友誼賓館のベランダにて）

『北京週報』は短期間に大急ぎで発行されるので、書籍の形で改めて出版する図書社では、その文章をより完成されたものに仕上げてほしいというのが任務であった。川越さんたちがすでに高い完成度でやり終えた文章に、若輩のわれわれがさらに手を加えるのは、手に余る仕事であった。ものすごいプレッシャーを感じた。しかも、図書社日本語組の組長・伍中さん(東京文理大学卒)が、我々の修正した原稿にさらに緑色インクでびっしりと修正意見を書き込んで戻してくる。なるほどと感心するものが多くて、「日本語の専門家」という建前からすると、メンツまる潰れである。自分が期待に応え切れない不甲斐なさに押しつぶされる毎日だった。

写真 3　天安門広場での式典にて②
左端が山本勝司、右端は伍中

吉田君も同じ気持ちのようであった。彼は東京教育大学卒で共立女子高校の数学の先生であって、日本語の専門家ではない。二人とも悩み果てたのち、心の内を打ち明けて、これから二人で協力し合おうよ、ということになった。お互いの仕事をチェックし合って問題箇所を指摘し合った。これで気が楽になったが、その分、仕事のペースが落ち、倍の時間が掛かったが、当分はやむをえなかった。

吉田浩一氏とは、これを機に親しい友となった。常に行動を共にしよく話し合った。街中を2人で歩いていると、子供たちから「1个瘦，1个胖」(デブっちょと痩せっぽちコンビ)とからかわれた。私が痩せっぽちで、吉田君が極端なデブだった。彼は開けっぴろげな性格でだれとも打ち解けて付き合い、皆から愛された。吉田君のお父さんは総評自治労の幹部と聞いた。日本共産党からは私と同じ時に除名された。日本への帰国は私より1、2年後だったかと思う。日本に帰国した吉田君は、まっすぐ工場労働者となり、数年を過ごした。その後、元の職場である受験ご三家の共立女子高校の数学の先生に戻った。得意の数学を教える喜びを日々感じていたようだし、生徒たちからも愛される名物教師だったようだ。その後体調を崩し若くしてこの世を去った。

私は大阪外大で中国語を学び、学生時代に多少の翻訳の練習はしたものの、けっして日本語の専門家といえる能力は持ち合わせていなかった。私のような者が、なぜこうした仕事のために派遣されたのかわからず大いに悩んだ。派遣された主な理由は、革命の学習なのだろうと心底から思い込んでいた。とはいえ、現実の日常生活では革命学習を援助するような段取りは中国側からは一切なく、高給、好待遇でむしろ精神を蝕むような贅沢な生活が用意されている。日本にいる労働者たちの境遇を思うと、心が痛み深い矛盾を感じた。日本ではだれからも具体的な仕事の説明はしてくれてはいなかった。あとから知ったのだが、外国の専門家からは高給・好待遇で知識技術を買えというのが、社会主義政策だったという。

我々は外文局に勤務した第二期生であった。第一期生は、戦前から満洲などで仕事をし、敗戦後も中国に残留した先輩たちであった。その中でも、川越敏孝さんや池田亮一さんらは非常に文章力のある方々だったが、第二期生のなかにはそのような日本語能力のある人材はいなかったと思われる。多くが共産党関係のコネで選ばれており、募集選抜方法がまずかったのではないかと思ったものだ。

私が改稿や翻訳を担当したのは、各種政治論文の薄いパンフレット、長編小説『欧陽海の歌』(金敬邁著)、『毛主席語録』、『毛沢東選集』第4巻、その他諸々の民話・書籍などであった。『毛主席語録』は最初に図書社で下訳が行われ、吉田と私の2人の改稿から始まった。のちに川越さんらが完成させたと聞く。『毛沢東選集』第4巻では、私と吉田もその翻訳作業に駆り出された[12)]。翻訳の編集会議メンバーは、中国側は張香山、趙安博、劉徳有ら10数名であり、日本側は浅川謙次(法政大学中国語講師)と川越敏孝、後に安藤彦太郎(早稲田大学)も加わったと聞く。私はその会議に数回だけ参加したが、後に小説『欧陽海の歌』の翻訳に専念することになり、『毛沢東選集』第4巻の翻訳会議には出席しなくなった。

当時北京にいた日本人専門家として、外文局以外では、北京大学の日本語教師として鈴木重歳・児玉綾子夫妻[13] や森新一・洋子夫妻[14]、そして日本から派遣されてきた鎌田さん（若い 20 歳代の人）らがいた。北京放送局には、仰木道之[15]、八木寛[16]、岡部慶治[17]、添田修平[18]、徳地末夫[19] などがご夫婦で勤務し、他に女性の中川さん[20] もいた[21]。徳地さんは元軍人であり、当時は仲間うちで「将軍」と呼ばれていた。仰木道之さんは、北京放送の有名なアナウンサーで、訪中前から私の憧れの的であった。朗々とした迫力ある彼の日本語放送に、日本にいる若者たちは毎晩心の高鳴りを覚えながら聞き惚れたものだ。その他、後続派として、毎日新聞の自称ベテラン元記者などもいた。

写真 4　天安門広場での式典にて③
左から森新一、児玉綾子、鈴木重歳

『北京週報』社には土肥駒次郎・種子夫妻も勤務していた。土肥駒次郎さんは、比較的年配であり、当時は日本共産党員ではなかったが、毛沢東の指導の見事さについて、身をもって学んだ経験を話してくれた。共産党員よりも情熱があって、話が上手な人だった。毛沢東の指導がいかにすばらしいか、民衆がいかに毛沢東を尊敬しているか、毛沢東の思想を実践することの喜びを情熱的に語ってくれた。北京友誼賓館宿舎の同じ階に住む川越敏孝さん宅では、吉田君とともに、毎晩のようにお茶・果物をご馳走になり、さまざまな話題を語り合った。横川次郎さんのお宅でもよく世話になった。

戦前からの残留組の日本人たちは、土肥さんだけでなく、中国共産党や毛沢東を賛美する人たちばかりだった。彼らは 1949 年の北京解放を目の当たりにしていたり、北京でなくても各地で同じような実体験をもっていて、共産党員や解放軍が民衆のため

写真 5　外文出版局の同僚たち
左から河野（川越）八重子、川越敏孝、吉田浩一

にいかに献身的に尽くすか、口を極めて語ってくれた。

比較的若い世代としては、高比良光司夫妻や聽濤学夫妻がいた[22]。高比良光司[23] は九州大学の学生運動のリーダーとのことであり、聽濤学は日本共産党幹部・聽涛克己の息子であり、学は北京語言学院留学生として中国語を学び、夫人は語学教員を務めていた。子供たち世代としては、西園寺公一の息子・一晃、八木寛の子供たちのゆかり（紫）、信人、鉄、章がおり[24]、中川の娘・万里子、徳地夫妻の子供たちとして一人 (長男)、立人（次男）、順子がいた[25]。

この他には、日本共産党北京細胞の責任者であり最高幹部の羅明がいた。彼は在日華僑の出身であり、中国語と日本語の両方が話せ、中国共産党と在北京日本共産党員との連絡員となっていた。羅明については後にも述べる。

1963 年には毛沢東が社会主義教育運動を提唱していたが、64 年には不完全燃焼で終わっていたようである。他方、林彪が『毛主席語録』や「老三篇」[26] の学習を主唱し、さらには雷鋒や王傑に学ぶ運動を展開していて、これからどういう動きに発展するのか、大いに期待させた。

旅行はなんどか行かないかと誘われたが、結局文革の前に一度だけ参加した。『人民中国』の幹部である康大川さんがつきあってくれて、上海、杭州、南京、湖南、洛陽あたりを数日かけて観光旅行をした記憶がある。あとは、最初の夏に、共産党幹部が重要会議を開くことで有名な避暑地の北戴河のリゾートホテルで贅沢な一週間をすごした。立派な一戸建ちの建物を 1 人占めするなど、ことごとに特別扱いだった。多くの日本人専門家たちも参加した。水

泳の好きな私は思う存分夏を楽しんだ。

3. 文化大革命の勃発と北京在住日本人

＜文化大革命が始まる＞

1966年4月頃になると、学生たちがドラ・太鼓を叩きスローガンを叫びながら、友誼賓館の前の自動車道路を疾駆するようになった。また、友誼賓館の隣にある北京理工大学の校舎からは連日激しいシュプレヒコールが聞こえ始めた。そして紅衛兵が出現した。今思い起すと、これが文化大革命の端緒であった。ハサミをもった女子紅衛兵が、長い髪をした女性を追いかけ回し、つかまえては髪を切っている、紅衛兵が古い商店の立派な看板を投げ落として破壊しているなどの噂が聞こえてきた。さっそく瑠璃廠や王府井へ出かけて見物したが、紅衛兵に出会うのは怖かった。何をするのかわからないので、怪物のように恐れた。街ではチラシが大量に配布されていた。私は当時、文革の混乱をそれほどたいしたものとは思わなかった。文化財を破壊する事件があったと聞くが、すぐに『人民日報』紙上で周恩来がいさめたので、納得してすぐに収まったと思っていた。67年の春にはやがて混乱が収まり、経済は伸びるであろうと予感していた。しかし、予想に反して混乱は長引いてしまった。

当時、憧れの毛沢東には2回会うことができた。1回目は1966年5月のメーデーの夜であり、天安門上で毛沢東、朱徳、周恩来、陳毅、林彪、彭真などから接見を受け、握手をしてもらった。おそらく、日本共産党に正面から反旗を翻したことを評価してくれたものであろうか。2回目は、1966年6月に開催されたAA作家会議でであった。作家でもない私がなぜ招かれたのかわからなかったが、ふたたび毛沢東に会えたのは、最高の喜びだった。京大教授の井上清団長、ならびに西園寺公一氏らと共に会見できた。

文革初期のある日、外文局の食堂に、大きな三角帽をかぶせられ紐で縛られた人物が突然引きずり回されてきた。何とそれは、私が尊敬していた国際書店の総経理だった。その総経理は時々私の宿舎を訪れ、親しく話をしてくれていた。私がオヤジのような親近感と尊敬の念を持った人物であった。理論的にも深くて、これこそ毛沢東の幹部かと憧れた人でもあった。それが突然引き回されてきたのを見た時には、吹っ飛ぶぐらいに驚いた。これからいったいどうなるのか、文革の意義を理解するのには時間がかかった。だが、中国をソ連修正主義のようにしないための幹部の再教育運動なのだと理解してからは心が落ち着いたし、文革の成功を心から願うようになった。

『人民日報』紙上では、連日重大論文が発表され、文革の意義を強調していた。文革は、中国の変質を防ぐための革命であり、幹部の堕落を正すための必要な革命であることを繰り返し宣伝していた。私は基本的にそれらの論文の主張を納得して受け止めた。中国へ来てから期待に反して多少なまっちょろい感覚をいだいていたので、連日心躍る喜びを覚えた。

文革が各地で激しくなると、外文局でも大きな食堂が全面壁新聞で埋め尽くされた。無数の壁新聞がびっしりと吊された。私も、在日華僑出身で日本語組の楊国光[27]と一緒に「七一戦闘隊」を結成して、壁新聞を発表した。局内では、当時「紅色戦闘隊」と「紅旗戦闘隊」という2大対立組織があったが、私たちはそのうちの「紅色戦闘隊」に参加し、その下部組織として「七一戦闘隊」を結成した。「紅色戦闘隊」は、対立する「紅旗戦闘隊」は元幹部たちが陰から牛耳る組織であると批判していた。はじめはお遊びのような他愛ない闘争であったが、しだいに暴力が絡み、集団による格闘が起き出した。楊国光が連行されて、ビルの屋上で数十人に取り囲まれて論争が繰り広げられた。楊はおびえることなく、その輪のなかで堂々と自分の主張をしていた。そのうちに彼が目標にされて攻撃されるというので、避難のために私のアパートの部屋に潜りこんできた。当時私は友誼賓館のホテル住まいをやめて庶民の生活をしたいと上訴して、ホテルを出払い、普通のアパートを提供してもらって暮らしていた。ただ、普通のアパートとはいえ完成したばかりの真新しいアパートであり、中国側にはかえって負担をかけたようだった。

私が帰国した後、楊国光は激しい迫害を受け、牢屋にも入れられるなど、非常につらい体験をしたという。彼が日本に来た時に、その話を聞いた。残念ながら楊国光は、数年前に亡くなってしまった。

社内では、私が尊敬していた方靖（国際書店関係

写真 6　執務室の楊国光

者）さんがビルの屋上から突き落とされて殺害される事件も発生した。これは悪質な便乗事件と思われ、事態の重大さを思い知らされた。ただ全般的に、日本人専門家は普段と変わりなく仕事を遂行した。中国人が集会で何時間も留守をしている時でも、日本人は仕事に従事した。私は、歴史博物館で開催された労働者 1000 人集会で日本の革命派代表として挨拶をさせられた。続いて、人民体育場での 1 万人集会での挨拶も求められたが、出発直前に危険な状況になったので集会が中止された。

長編小説『欧陽海の歌』の翻訳には、半年から 1 年ほどの時間を費やしたと思うが、今でははっきりとは思い出せない。自宅に缶詰となって取り組み、最後は体が全く動かない疲労のどん底となった。劇作家の村山知義の息子さんで児童文学作家の村山亜土[28] さんが、善意で私の原稿をもう一度全部見直して、美しい文章に仕上げてくれた。村山亜土さんは、障害を持つ息子さんの錬ちゃんと一緒に友誼賓館に住んでいた。おそらく、河野八重子（川越敏孝夫人）さんが苦しんでいる私の状況を見て、助けてやりたいと考え、村山さんに相談をしてくれたものと思う。村山さんは中国語がわからないので、原文にこだわらずに自由闊達に修正してくれたので、生き生きとした日本語になった。あの大部の小説に全部手を入れた苦労は、並大抵のものではなかったであろう。何の謝礼も出ず、名前も残らない、こんな仕事を引き受けてくれる人がこの世にいることを、心から感謝した。村山さんにはその後、何のお礼もできていない。障害をもつ息子さんのために、何か役に立つことでもできたらと、心の中で思ったが、それも出来なかった。

＜日本共産党との決別＞

日本共産党北京細胞に対して、中央委員・砂間一良、赤旗特派員・紺野純一から、中国共産党の路線は間違いであり、日本共産党の方針に従って欲しいとの圧力が来た。そして北京在住全日本人党員による党員会議の開催が準備された。当時、外文局・北京大学に勤務する党員は 20 人ほどおり、他に北京放送局に 10 人ほどいたと思われる。友誼賓館に居住する共産党員は毎週細胞会議を開催していたが、北京在住党員を集めての全体会議はそれほど多くはなかった。この会議に向けて私は、発言メモを準備し、事前に川越さんに見てもらったところ、川越さんが「山本さんがこれを発言したら、すぐに私が支持の発言をします」と言ってくれた。当日の私の発言内容は次のようなものであった。

1. 対ソ連修正主義に対して――ソ連修正主義路線を強く批判、曖昧な日本共産党の姿勢を批判。
2. 文革の評価――修正主義化を回避し、健全な党建設をめざす文革を断固支持する。
3. ベトナム戦争――実力闘争を含む断固たる支援闘争をすべきだ。
4. 議会闘争批判――ベトナムの米軍の後方基地日本として、軍事闘争を含めた実力闘争を主張。

要するに、日本共産党の主張を全面的に否定し批判したのである。

川越さんも続いて発言し、私への支持を表明した。さらに、ほとんどの党員が日本共産党中央に反対したが、一部われわれと袂を分けた人々もいた。結局私は発言した人々とともに、除名され党籍を剥奪された。われわれと袂を分かって帰国したのは、高野好久、川邑重光ら 4，5 人だけだった。残りの大部分が日本共産党から除名された。

その後、中国共産党の路線を支持する日本人グループにより、党再建問題が共通課題となった。その時、羅明と組んだ高比良氏が異常な興奮状態に陥り、高比良氏は私を自分の従順な追随者にしたくて狂気じみた工作をした。私がそれに乗らなかったので、彼は急に私への攻撃を開始した。ある日、私をつるし上げるための元党員会議 (20 ～ 30 名の出席) が開かれた。場所は羅明が事務所としていた四合院の建物であった。どこから知ったのか、突如中共中央対

外連絡部の趙安博ほか数人が乗り込んできて、「内輪もめは止めろ」と詰め寄った。そして、会議は散会させられ、私はつるし上げを免れた。この会議の後、羅明と高比良がどうなったかは不明である。

やがて、四川グループ（田さん、陳さん、劉さん、高さん、その他）が、私達に接近して来た。「白鳥事件」の関係者で中国に亡命していたと聞く。厳しい環境の中で中国人と同様に毛沢東思想の実地教育を受けた四川グループは、特別の存在であった。彼らは、中国共産党とのパイプがあるかのような態度を取り、また中共の代弁者的立場を装うなど、怪しい存在でもあった。田さんがしきりに私に接近してきて、四川の現場での彼らの学習活動の経験を話してくれた。北京で我々が見ているのとは180度違う厳しい世界が語られた。彼らから学びたいという気持ちと、相反して敬遠すべきだという複雑な気持ちが、私の中に生じた。特に強烈だったのは、裏切り者（転向者）への厳しい姿勢だった。彼らは、日本共産党北京細胞内にいる戦前の「転向者」と同席すること自体を批判した。それら「転向者」と同調するのは、闘争性がなまっている証拠だと言わんばかりであった。当時、中国社会でも「叛徒」（転向者）批判が激しく行われていた。私は四川グループのこうした姿勢には違和感と恐怖感を覚えた。

1967年には、劇団はぐるま座が北京で公演した[29]。たしか、農民一揆をテーマにした劇が上演されたと記憶するが、同劇団の舞台には、山口県の日本共産党（左派）の考え方が明確に表現されていて、軟弱な闘争姿勢に対して痛烈な批判を展開しており、あまりにも強烈な闘争性に圧倒された。それはどこか四川グループの裏切り者指弾の考え方と共通するところがあり、少し辟易した。私達の中では、山口県左派を支持するかどうかで議論が広がった。山口県左派の強い姿勢は、四川グループとも通じるところがあり、四川グループをいたく刺激したようだった。こうして、四川グループの中で、強い過激姿勢が首をもたげはじめていた。

1967年8月、元党員の会議で、砂間一良と紺野純一が帰国するのに際して、何らかの態度を示す必要があるが、どうするかという問題が提起された。赤旗特派員のＩ氏が終始会議をリードし、強い姿勢を示すべきだと強調した。Ｉ氏は三角帽を被せて小突き回すべきだと主張した。私は馬鹿馬鹿しくなって、「そんな子供っぽいことはできない、シュプレヒコールだけで十分だ」と主張したが、Ｉ氏は軟弱だとして私を批判した。Ｉ氏は四川グループと図っていたのだろうか。たいそうな剣幕で鼻息が荒かった。その裏には、山口県左派の強い姿勢に応える意識が感じられた。結局、北京空港では、空港建物から飛行機まで100ｍぐらいを、2列に並んだ我々の間を砂間らに通らせて、シュプレヒコールを浴びせた。学生グループか若い連中が、殴りつけたり蹴飛ばしたりしていた。なぜか中国側も大勢来ていた。これが世にいう「北京空港事件」である。この事件は、現場ではちっぽけなトラブルだったが、日本共産党は新聞『赤旗』で大々的に報じ、日本では私への攻撃も行われたらしい。私が首謀者であるかのような記事が出たと聞く。大阪外大の学友のＫ君は、帰国後再会したときに握手もしなかった。数十年後の同窓会で詳細を説明して、理解はしてもらえたと思っている。私は、その後、帰国準備もあり、また日本人の間で党の再建問題を語る会合もなくなって、その後の四川グループの消息も知らない。

4. 帰国と出版事業の創業、そして中国への想い

＜帰国と創業＞

1968年春には、極東書店の安井正幸社長から再々にわたって帰国催促があり、帰国することになった。同年に帰国して、1年間は東方書店の京都支社に勤務した。もとの極東書店は党の分裂を機に分裂し、極東書店の社長であった安井正幸社長が極東書店を離脱して、あらたに東方書店を設立し社長に就任していた。私はその京都支店に勤めた。翌69年には東京本社へ転属し、最初は編集部に所属したが、後に営業部に移動した。当時は70年安保闘争があり、騒がしい時代であった。また、各種左派政党の建設や日中友好運動の高まりもあった。ただ、私は党派活動には参加せず、状況を把握するために観察していた。結局、東京で10年間勤務したが、会社の方向になじめず退社した。

そして1980年6月に独立して、東洋学術出版社を設立し、中医学の世界に飛び込んだ。新会社は雑誌『中医臨床』と中医学関係の専門書の出版を専門とした。中医学という特殊な分野ではあるが、中国の病院、医者、出版社と連携して仕事をしてきてお

り、今日では当社は日本の漢方界で積極的な役割を果たしている。

菅沼不二男・久美夫妻の一人息子である菅沼伸さんには、東洋学術出版社の活動にご協力いただいた。伸さんは6歳の時に両親と帰国し、1974年に再び中国に留学し、1年間語学の勉強をしたのち、中医学を学ぶために北京中医学院に入学し、本科生として79年まで5年間しっかりと勉強した。これは、中医学留学ブームの嚆矢であった。伸さんは、本格的な中医師の資格を得て帰国後は、日中医学交流の橋渡しとして、翻訳・通訳・中医学の講師として大活躍をした。特に、彼の通訳としての力量は極めて高かった。北京には全国から名医が集められていて、地方なまりの溜まり場であったために、座談会などを開くと数カ国語を同時に通訳するような高度な芸当が必要だった。それを彼は何事もなかったかのように、見事にこなした。夫人の胡栄（菅沼栄）さんも優秀な中国人中医師であり、来日後は伸さんと共に中医学の普及に取り組み、現在も活躍され、多くのお弟子さんたちから慕われている。残念ながら伸さんは、2012年に57歳の若さで亡くなった[30)]。

中医学の世界では、菅沼伸さんたちが留学したころがひとつの先駆けとなって、日本中医学のピークが形成された。中医学を学ぼうとする機運が国中に広がり、大勢の若者が中国へ留学した。数百人に上ろうか。

東洋学術出版社は私が42歳のときに発足させた。千葉県市川市の片田舎の自宅を事務所に、文字通り電話とちゃぶ台だけでスタートした。中国の針麻酔報道に刺激を受けて日本では、中国の伝統医学への関心が高まっていた。そんなときに発刊した季刊『中医臨床』は、中国の鍼灸関係の文献を翻訳紹介するというので、大いに歓迎された。のちには鍼灸に加えて、中医学というしっかりとした伝統性をもつ医学大系を全面的に紹介することに力を注いだ。

中医学は2千年前の漢代に制作された『黄帝内経素問』や『傷寒論』『金匱要略』『難経』といった古典にのっとり、その上に膨大な医家たちの経験が蓄積された巨大な医学大系である。使われる用語は現代中国語とはまったく異なる漢文であり、明代・清代の中国語も実に難解である。そして独特の専門用語が大量にある。現代中国語を学んだからといって簡単に訳せるものではない。第1に医学知識を一から学ばねばならない。42歳から懸命にこれに取り組んだ。さいわい帰国留学生が大勢帰ってきてくれたこと、中国からも数多くの中医専門家が来日していて教えてくれた。多くの人々に守られて中医学導入事業を成功させることができた。

当社では教科書、辞典、歴史、臨床各部門の経験を総合的に紹介してきた。特に季刊『中医臨床』は40年を経る基幹事業であった。数社の出版社が同じような試みをしてきたが、大部分は消滅し、唯一東洋学術出版社だけが今日まで存続して元気に活動を続けている。今年で創立40周年になる。社員は約10名。私は2010年に75歳で社長を引退し、後を継いでくれた若い社長に会社を任せ、名前だけの会長についている。あわせて、2010年に日本中医学会が設立されたが、この設立にも関与して、学会顧問をしている。現在、日々暢気に隠居生活を楽しんでいる。

＜中国への想い＞

最後に文化大革命に対する私の見解を述べたい。私の北京滞在は68年までと文革の初期段階であり、体験もごく狭い範囲に限定されているので、私の見解は限られた特殊なものかもしれない。ともかく私の理解では、毛沢東の文化大革命がめざしたものは、中国の変質を防ぐための文化の革命であり、幹部の覚悟を問い、党建設を進めるものであった。ただ、その過程で予想さえしなかった混乱もあった。現在は文革を評価する人はほとんどいないが、そこで提起された文化の革命という問題意識は重要であり、必ず引き継がれるべきものである。たしかに、鄧小平の下で経済建設、技術建設は進んだが、それだけでは不十分であり、これから精神世界・文化の建設の時代が必ず来る。習近平は文革の精神を引き継ぎ、反腐敗闘争を進めており、彼の政策に大いに期待したい。これによって中国が新しい文明を創造・構築していくことを願っている。

思えば、中国とは長い付き合いであった。大阪外大中国語科に入学したのは、新中国成立の1949年からわずか6年後の1956年であった。新中国が誕生してまもなくだった。それから今日までいくたの変遷を遂げてきたが、この64年間、一貫して中国と仕事をしてきた。私の人生は、ほとんど新中国と歩みをともにしてきた。面白い人生であったともい

える。

（注）

1）菅沼不二男（1909-1983）、大分県生まれ、1932年東京帝国大学法学部卒、同盟通信社政治部に勤務し、37年新京に派遣、39年同社華中総局（上海）に赴任、44年春召集を受け新京の関東軍司令部第2科に配属され、新京で敗戦を迎えた。46年4月、中共軍が長春（旧新京）に入ると「日本人民主連盟」を組織し、日本語新聞『民主日本』を発行した。しかし、1ヵ月後に中共軍は長春から撤退することとなり、菅沼も中共軍と共に佳木斯に移動した。佳木斯では現地の日本人のための日本語新聞の発行に従事した。また同地で檀一雄の妹・久美と結婚した。49年5月瀋陽に移り、東北人民政府外事局「日本人管理委員会」の責任者・趙安博の下で日本語新聞『民主新聞』の発行業務に従事した。53年には夫婦で北京に移動し、外文出版社に所属し『人民中国』の編集出版に従事した。61年、6歳になる息子・伸に日本での教育を受けさせるため帰国した。帰国後は、新日本通商株式会社の会長となり、その後日中旅行社を設立して社長を務めた（劉徳有「わが人生に悔いなし―菅沼不二男氏」中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『続新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、2005年）。

2）池田亮一（1906-1963）、岡山県生まれ、本名・三村亮一、1930年京都帝国大学経済学部卒、早くから革命運動に従事し、日本共産党員として機関紙『赤旗』編集長も務めた。32年「熱海事件」で逮捕され入獄し、出獄後、満洲に渡り、大東協会研究員を経て、満洲映画協会（満映）に就職した。檀一雄の妹・寿美と結婚。敗戦後、満映はソ連軍により「東北電影公司」に改組され中共の影響下に入り、46年5月中共軍の長春撤退に伴い同公司も北上し、池田は多くの旧満映スタッフと共に、ソ連国境近くの合江省興山市（現在の黒龍江省鶴崗市）に移った。瀋陽の日本語新聞『民主新聞』社を経て、53年春、寿美夫人と共に北京の外文出版社の『人民中国』編集部に招聘された。同編集部で10年間勤務したが、63年10月、北京にて急逝した（劉徳有「『人民中国』誌に刻まれた事績―池田亮一氏」前掲『続新中国に貢献した日本人たち』）。なお、作家・檀一雄、寿美・久美姉妹、及び彼ら兄妹を生み育てた母・高岩トミなどの家族の歴史については、一雄の異父妹により書かれた、笠耐『ある昭和の家族「火宅の人」の母と妹たち』（岩波書店、2014年）がある。

3）国務院直属の機関であり、正式名称は中国外文出版発行事業局。1963年9月までは「外文出版社」の総称で、共産党中央対外連絡部の指導下にあった（川越敏孝『回想―戦中・戦後の日中を生きて』岩波ブックセンター、2015年、365頁）。

4）1963年に日本語版の創刊。創刊当初は中国語の「周」をそのまま使い、1980年代後半になってから『北京週報』に改められた（同上書、400頁）。なお、『人民中国』日本語版の初代編集長は康大川であり、彼への聞き取りは、水谷尚子『「反日」以前―中国対日工作者たちの回想』（文藝春秋、2006年）に掲載されている。

5）高野梅子は、『赤旗』北京特派員の高野好久の夫人であった（前掲『回想―戦中・戦後の日中を生きて』414頁）。

6）土肥駒次郎（1911-？）、1932年神戸高商卒、大連にて土肥商会を経営し、工作鉱山機械を売買していた（『昭和人名辞典第4巻〔外地・満支・海外篇〕』日本図書センター、1987年）。敗戦後の経歴は、不明の点が多い。戦後大連市において土肥と共に活動を行った玖村芳男によれば、土肥は戦前の日本共産党の非合法活動の経験があり、大連では会社を経営してかなりの金も溜めていたが、中共指導の大連市政府ができると一切の財産を投げ出して同政府への協力を誓ったとされる。そして、戦後大連の在華日本共産主義者同盟旅大地区工作委員会の政治部長として活動したとする（玖村芳男『長い道』第4巻、東陽書房、1988年、417、418頁）。土肥の大連での状況は、石堂清倫『わが異端の昭和史』（勁草書房、1986年）でも触れられている（同書、293、308、355頁）。国谷氏によれば、土肥の長男は中国籍となり、次男と長女は文革期に紅衛兵として活動し、日本に戻ったあとは日本共産党（左派）に参加したとのことである（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年9月19日）。なお、土肥種子は、1936年に渡中、45年に革命に参加、63年に夫・土肥駒次郎と共に『北京週報』社の日本語部専門家に就任し、定年退職まで勤務して、2003年に北京で卒寿を迎えたとされる。この63年は前述のように、『北京週報』日本語版が創刊された年である（「北京週報年代記」、http://www.pekinshuho.com/50/txt/2008-04/28/content_113117.htm、2020年9月24日閲覧）。

7）白鳥冨美子は、東京女子高等師範学校理科卒、長野県立長野高等女学校数学教師として勤務し、結婚と同時に中国に渡り、戦後は夫と共に大連で留用されたとされる（前掲『回想―戦中・戦後の日中を生きて』413、479頁、白鳥冨美子「わが師・わが友・わが数学わが青春の日々」『数学セミナー』第20巻第2号、1981年2月）。なお、白鳥冨美子のご主人の氏名は不明であるが、同氏は東大工学部の出身とされている（伏見和郎『科学技術者のみた文革前後の北京大学』日中出版、1980年、191頁）。

8）川邑重光（1939-2020）、1960年名古屋大学細胞で日本共産党に入党、63年名古屋中部地区専従、67年赤旗編集局局員、その後赤旗編集局長、党常任幹部会委員などの要職を歴任し、2014年に党中央委員会名誉役員となった（『しんぶん赤旗』2020年2月11日）。

9）横川次郎（1901-1989）、福島県生まれ、1924年東京帝国大学法学部卒、宇都宮高等農林学校の教授となるが、29年「赤化教授」として解雇された。その後、翻訳業などを経て、36年満鉄嘱託となり経済調査会に所属した。42年満鉄調査部事件で検挙され投獄されたが、44年末保釈され新京で暮らし、敗戦を同地で迎えた。戦後長春において大塚有章などと共に「日本人解放同盟」を設立し、46年4月には中共軍指導下で「日本人民主連盟」を組織した。同年5月の中共軍長春撤退に伴い、哈爾濱・佳木斯を経て鶴崗炭鉱に移動し、同炭鉱で日本人工作に従事した。48年秋には哈爾濱の東北人民政府統計局に異動となり、後に同局は瀋陽に移った。50年11月に一家で北京に移り、北京機関の活動に従事し、同機関解散後は「マレー学院」（日本共産党「党学校」）にて教学を担当した。57年夏より中国農業研究のために四川省農業庁で勤務した。61年北京に戻り、夫人と共に『人民中国』編集部に招聘され、後に『中国画報』社に転属した（横川次郎著・陸汝富訳『我走過的崎嶇小路―横川次郎回憶録』新世界出版社、1991年、劉徳有「横川次郎氏を偲ぶ」中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『新中国に貢献した日本人たち』日本僑報社、2003年）。横川辰子については、小池晴子『中国に生きた外国人―不思議ホテル北京友誼賓館』（径書房、2009年）で詳しく紹介されており、99年の逝去や葬儀の模様も語られている（同上書、115-121頁）。

10）1964年当時のレートは1元146円であり、420元は日本円で約6万1000円であった。大連の日本語教師達の給料も420～500元と、日本国内での給料を上回る額が支給されていた。山本経天（経志江）「第6章 新中国に支援した日本共産党員―大連日語専科学校の日本人教師団」（『中日国交断絶期の日本語習得者に関する研究』科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書、2013年3月）12頁。

11）1963年9月から64年7月にかけて、『人民日報』と『紅旗』両編集部の連名で発表された中共中央によるソ連共産党批判の9本の長大論文である（天児慧ほか編『岩波現代中国事典』岩波書店、1999年、852、853頁、前掲『回想―戦中・戦後の日中を生きて』399頁）。

12）『毛沢東選集』第4巻の日中共同での改訳作業については、前掲『回想―戦中・戦後の日中を生きて』420頁。

13）鈴木重歳（1908-1975）、京都帝国大学経済学部在学中の1932年共産党・全協再建に関連して同大退学処分、東洋経済新報社を経て39年満鉄に嘱託として入社、上海事務所調査室勤務、満鉄調査部事件の影響により、大連埠頭局大連駅駅務員となる。戦後は中長鉄路公司社会科学研究ビューローを経て、中共側に留用された（井村哲郎編『満鉄調査部―関係者の証言―』アジア経済研究所、1996年、797頁）。先妻は河上肇の次女・芳子であるが、49年10月に大連にて死別している。また、鈴木は北京大学に移る前は、日本共産党の北京機関に勤務していた（飯塚靖「回想記解題 国谷哲資「北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史」」『アジア社会文化研究』第20号、2019年3月、80頁）。児玉綾子（1923-1995）、新潟県生まれ、子供の頃両親と共に渡満し、その後帰国して42年大妻女子短期大学を卒業し、44年再び両親と渡満する。47年以降、中共側に協力し、東北新華放送局でアナウンサーを勤め、56年春より北京大学東方言語学部日本語学科において夫婦で教鞭をとることとなった（駱為竜・陳耐軒「北京大学の日本語教師―児玉綾子先生」前掲『新中国に貢献した日本人たち』）。

14）森新一（1917-2017）、奉天生まれ、哈爾濱学院に学び、卒業後同学院の教員となる。1945年から57年中国東北や北京で活動、57年人民大学の日本語専家に就任、70年には日本に帰国し福島県日中友好協会事務局長を務め、80年に中国に戻り人民大学日本語専家となり、その後北京で暮らした（『中国人民大学外国語学院工作簡訊』2017年3月21日）。森新一は哈爾濱学院第16期生であり、同期生の沖津正巳が回想文の中で同氏について言及している（沖津正巳「『昨日の非』とは誰かいふ　元大本営情報将校の『今是昨非』」『哈爾濱学院史』恵雅堂出版株式会社、1987年、572頁）。なお、国谷氏によれば、森新一も自由日本放送の調査部で勤務していたとされ、妻・洋子は児玉綾子の妹であり、文革期には森夫婦は中国側を支持したとされる（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年8月25日）。なお、前掲『科学技術者のみた文革前後の北京大学』（38頁）でも、洋子は児玉綾子の妹であり、中国風に旧姓の児玉で呼ばれていたとしている。

15）仰木道之（1930-？）、現在の北九州市に生まれる、父親は八幡製鉄所の工場に勤務、12歳で満蒙開拓青少年義勇隊員として満洲に渡り、敗戦後留用されゴム製品工場で働いたとされる（林華氏による光子夫人への聞き取り、2020年5月）。国谷氏によれば、奥さんは日本共産党の紹介により北京に渡り、北京で結婚したとされる。その後、1970年代の初めに帰国し、一時期は旅行社を経営していたとのことである（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年4月12日）。

16）八木寛（1915-2009）、愛媛県今治市生まれ、岐阜中学を中退して1935年に満洲に渡り中国語を習得し、満洲国通信社雇員を経て39年に新民映画協会（満洲映画協会の北京出張所）に就職、その後新京の満洲映画協会に移り文芸部に所属しシナリオライターとして活躍した。41年1月には新潟県出身のトシ（敏）と結婚した。敗戦後、満映はソ連軍により「東北電影公司」に改組され中共の影響下に入り、46年5月同公司の鶴崗移転に伴い、八木一家も鶴崗に移動し、同公司が改

組された「東北電影製片廠」の所属となった。ただ、中共の精兵簡政（人員を削減し行政を簡素化する政策）の中で、八木は旧満映の仲間と共に沙河子での労働に従事することとなり、同廠を離れた。48年8月には、東北新華放送局に転属し、日本語ラジオ放送の編輯に参画し、49年10月一家で北京に赴き、北京放送局の日本語放送に従事することとなった。70年に帰国、東方書店の出版業務に従事したが、95年からは夫婦で北京にて暮らした。以上は、孫東民「新中国の日本語放送と八木寛氏」（前掲『新中国に貢献した日本人たち』）、山口猛『幻のキネマ満映』（平凡社、2006年）、及び八木寛の三男・八木章の「華風（ホワフォン）」（八木章のブログ）に掲載された「私の父・八木寛の『わが自分史』」を参考にした。

17）岡部慶治については、詳しい経歴は不明である。『朝日ジャーナル』座談会の出席者紹介欄では、岡部は1942年に中国に渡り、72年に帰国、72年当時年齢47歳とされている（「帰国者座談会　中国の庶民生活」『朝日ジャーナル』第14巻第40号、1972年10月）。国谷氏によれば、自由日本放送において受信部班長として国谷氏の上司であったとのことであり、岡部も戦後東北での留用者であったと考えられる。自由日本放送解散後にはマレー学院（「党学校」）に移り（国谷氏の推測）、その後1年間四川省で暮らし、四川省で日本人と結婚して、北京に戻った。日本に帰国後は、ぬやまひろし（西沢隆二）主宰の『毛沢東思想研究』の編集（五同産業社員）を務めた（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年4月12日）。なお、岡部については、川越著書では『毛沢東選集』第1～3巻の改訳担当者として名前が上げられている（前掲『回想―戦中・戦後の日中を生きて』422頁）。

18）添田修平（1929-　）、神奈川県大磯町生まれ、1952年東北大学経済学部卒、早稲田大学大学院文学研究科修了（ロシア文学）。日本電波ニュース社に勤務後、63年に妻である内海博子と共に渡中し、北京放送局に入局した。日本語部に所属し、戦後日本から招聘された最初の局員として、それぞれ趙志行、葉静の名を用い夫妻でアナウンサーを務めた。外国人専門家としての長年の功績が認められ、1986年12月に中国政府より永住権を与えられ、2002年に退職した（「日本語放送に捧げた五十年―北京放送における国際文化交流と日本語教育―」日本語教育映像アーカイブ、https://oralhistory-jle.com/archive/158/、2020年9月20日閲覧）。なお、奥さんの内海博子は、鎌倉市生まれであり、高校卒業後は鎌倉市役所に勤務、中央合唱団（日本共産党系）に所属、1993年に北京にて病死した（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年4月12日、林華氏よりのご教示、2020年5月7日）。

19）徳地末夫は、次男・立人によれば、陸軍士官学校を出た職業軍人、大戦末期ニューギニアに派遣、九死に一生を得て復員し、母と結婚する。元軍人による訪中団の活動に加わり、その後も日中友好のために活動し、中国政府から中国の放送局で働くよう誘いを受け、1964年春に家族で北京に移り住んだとされる（徳地立人「社会は一夜にして変わり、大衆は間違うこともある」日経ビジネス電子版、2019年10月25日）。徳地は、陸軍士官学校第52期「航士」卒（1939年9月）であることが確認できる（秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会、1991年、598頁）。また元陸軍中将で戦後は護憲・反戦の立場に立ち中国との交流を進めた遠藤三郎によれば、1960年の安保闘争の後、遠藤が個人的に中国側の招待を受け徳地を伴い訪中し、帰国後徳地の提案により61年8月に「日中友好元軍人の会」を組織したとされる。72年遠藤が訪中した際には、徳地は遠藤を北京で迎えている（遠藤三郎『日中十五年戦争と私』日中書林、1974年、356、477、478、485頁）。なお、徳地の妻・香縷子（かるこ）は北京外国語学校（小学から高校）の日本語教師を務めた（「中国の証券会社と共に歩んで～徳地立人さんに聞く」（上）2019年9月10日、CRIonline、japanese.cri.cn/20190910/60b4fe25-5e5c-2214-6abd-23ebcf65e085.html、2020年9月21日閲覧）。

20）国谷氏によれば、この人は中川四郎の奥さんとのことである。中川四郎は、中西功と東亜同文書院の同級生であり、戦後も中国に残り、北京機関の自由日本放送に勤務し、その後北京放送局に移ったが、1959年癌により死去した（国谷哲資「北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史―」『アジア社会文化研究』第20号、2019年3月、71頁）。なお、敗戦後、奥さんと娘さんは日本に帰国したが、1950年代半ばには北京に呼び寄せ、一家で暮らしたとのことである（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年9月18日）。

21）国谷氏によれば、北京放送局には技術者の中沢さんもいた。同氏は瀋陽での放送局勤務を経て自由日本放送に移り、その後北京放送局に異動したが、文革では造反派には加わらなかったとされる（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年9月18日）。

22）伏見和郎の著書では、その婦人の氏名を、高比良操、聴涛暢子としている（前掲『科学技術者のみた文革前後の北京大学』194頁）。

23）高比良光司は、五島列島の出身であり、九州大学の学生時代に中国訪問団の一員として樺美智子氏の両親と共に訪中し、中国が好きになった。その後、外文出版局に派遣され、文革開始後まもなくして帰国、日本共産党（左派）として下関において活動したが、1973、74年頃に運動より離れ、その4、5年後に死去したとされる（国谷哲資氏からの聞き取り、2020年3月17日）。

24）八木寛の子供たちは、後に中国と深く関わることになった。高橋ゆかり（結婚後高橋姓）は中国語の名通

訳者となり、信人、章の二人は電通に勤務し中国で仕事をした（前掲「新中国の日本語放送と八木寛」143頁、及び前掲「華風（ホワフォン）」八木章のブログ）。

25）川越敏孝氏の娘・陽子さんの証言によると、徳地の子供たちは日本帰国後、長男は日中友好商社に勤務、次男は大和証券に勤務、長女は鍼灸師となったとされる（国谷氏からの聞き取り、2020年9月18日）。なお、次男・立人の経歴は、1952年東京生まれ、64年から77年の13年間北京で暮らし、北京大学中国文学科卒、スタンフォード大学東アジア研究センターにて修士号を取得。20数年間大和証券に勤務し、米国、香港、北京、シンガポールなどで国際投資銀行業務に従事。2002年に、中国政府系大手コングロマリットである中国中信集団公司（CITIC Group）傘下の中信証券に副社長として入社、その後、マネージングディレクター兼投資銀行委員会主席などを歴任し、2015年末退任とある（前掲「中国の証券会社と共に歩んで〜徳地立人さんに聞く」（上））。

26）「老三篇」とは、毛沢東の延安時代の著作である「ベチューンを記念する」（1939年）、「人民に奉仕する」（1944年）、「愚公、山を移す」（1945年）の総称であり、文革中は大衆や幹部の必読文献となった（前掲『岩波現代中国事典』1319頁）。

27）著書に『ある台湾人の軌跡―楊春松とその時代』（露満堂、1999年）、『ゾルゲ、上海ニ潜入ス―日本の大陸侵略と国際情報戦』（社会評論社、2009年）がある。楊国光は文革期の外文出版局の状況を、「私の所属する出版社は海外から帰国した知識人が多かったことも災いして修羅の巷と化し、死者も出た」とし、自身は「私はソ連の特務・スパイ、『帝（帝国主義）、修（修正主義）、反（国民党反動派）の典型的代表』のレッテルを貼られて吊るし上げられ、便所の掃除などを1年間させられた後、わずか3年と7ヵ月だが、監獄に入れられた」としている（『ゾルゲ、上海ニ潜入ス―日本の大陸侵略と国際情報戦』251、252頁）。

28）村山亜土（1925-2002）、東京生まれ、成城高校（旧制）文科乙類卒、児童劇作家、父は前衛劇作家で美術家の村山知義。1984年、一人息子が「ぼくら盲人にもロダンの彫刻を見る権利があるはずじゃないか」と言った一言が忘れられず、新居の一部を開放して「手で見るギャラリーTOM(現・ギャラリーTOM)」を開館した（『20世紀日本人名辞典』日本アソシエーツ、2004年、2503頁）。なお、伏見和郎は、村山について、「レンチャンと呼んでいた病気の子供の漢方による治療のために長期に中国に滞在していた」としている（前掲『科学技術者のみた文革前後の北京大学』194頁）。

29）劇団はぐるま座は、1967年7月に訪中し、その後4ヵ月にわたって中国各地を公演した。その演目は『野火』と『嵐も吹雪もどんと来い』であった（藤川夏子『私の歩いた道―女優藤川夏子自伝』劇団はぐるま座、2003年、295、296頁）。

30）山本勝司「〔追悼〕菅沼　伸氏のご逝去を悼む」、東洋学術出版社ホームページ。